



沖縄大学図書館

第41号

2005.10.1

南十字星

発行：沖縄大学図書館

〒902-8521

沖縄県那覇市字国場555

TEL (098) 832-5577

(館報 南十字星)

FAX (098) 834-1127

新刊紹介

『日露戦争百年』-沖縄人と中国の戦場 (同時代社 2005年)

人文学部教授 又吉盛清

私が何故この本を書いたのかというと、一つは戦後60年と日露戦争百年の歴史の節目を迎え、日本(沖縄)人にとって日露戦争をどのように受け止め、考えるかということと、今までよく言われてきた日本国が、日露戦争の勝利によって「近代化」して「強国」になり、「国際化」もしたという、「賛美的」なことで済まされるのか、戦場になった朝鮮・韓国、中国人の戦争体験の証言などによってその実相を明らかにし、日本(沖縄)近現代史の中に位置づけ直して、東アジアの善隣友好の平和的な共存、共生と連帯の体制を築きたいという、思いからであった。

沖縄人にとって日露戦争は、琉球国が1879年(明治12年)日本国家に統合されて滅亡して、「帝国軍人」になり「自国防衛」の名の下に大挙して武器を携帯、本格的な大量殺りくの近代戦争に出兵したもので、日清戦争に次ぐ「沖縄人の戦争」であった。それはまた朝鮮・韓国、中国を戦場にして侵略戦争と植民地支配に加担するもで、沖縄人が被害者から加害者へと大きく転落する沖縄近代史の始まりでもあった。

沖縄人は、明治政府の「同化」、「皇民化」教育などによって「日本人化」を受け入れ、沖縄からも二千人余の兵士が出兵し205人の戦死者と149人の戦傷者が出た。これらの沖縄人兵士の戦死者の氏名、出身市町村、戦場は沖縄県護国神社に合祀された「明細帳」に記載されて明らかになっている。

私はこの「明細帳」を手がかりにして、初めて中国の東北部に点在する戦場跡を回り、沖縄人兵士の戦死状況を解明することができた。そうしてその戦場跡を死者との語らいに沖縄産の黒糖と泡盛を携えて行き、沖縄人兵士の戦死を痛み非戦を誓うと共に、郷土沖縄の父母や兄弟のもとで戦死者を供養するため、戦場跡から戦死者205人の形見にと、205個の石を拾い集めて沖縄に持ち帰ったのである。

高橋哲哉(東京大学大学院教授)は、沖縄タイムスの書評(2005.8.14)で、そのことを「沖縄人が戦死した戦場に立ち、戦死者ひとりひとりの名前まで可能な限り本書に記録していく又吉の執念と、戦死者への深い哀悼の念が伝わってくるようだ」と記した。

本書はその探訪記でもあり、これから多くの関係者が、この戦場の地で自省し非戦を誓い、平和を発信する国際交流と民際交流の場として探訪できるように、沖縄人兵士の戦場跡と戦死状況を知ることが出来る地図も作成しておいた。

本書では、初めて中国側との共同研究によって、中国での日露戦争の位置づけ、実態を明らかにした。その日露戦争体験者の証言記録は、日本(沖縄)人が初めて目にするものである。日露両軍の住民への放火、殺人、強姦、略奪、スパイ容疑などその蛮行は目を覆いたくなるものがある。日露戦争が決して「賛美」できるものではないことは、この証言だけでも十分に理解できることである。

北杜夫 著

『船乗りクプクプの冒険』

(新潮社 1971年発行)

人文学部教授 宮 城 能 彦

誰にでも、転機となった本があると思う。

ほとんど読書などしなかった高校生の頃、偶然に手にした本がこの『船乗りクプクプの冒険』だった。題名からして小学生向けの絵本のようで、さすがに高校生が読むのは恥ずかしいような気がしてこっそりと読んでいた。

この本は、読書嫌いな生徒にとっては魅力的な書き出しである。

「諸君のうちで宿題の好きな人がいるだろうか。日本でもイギリスでもポルトガルでも中国でも、宿題というものはだれもがきらいだ。どんな偉い人でも、科学者でも、市長さんでも、校長先生でも、やっぱり宿題は好きでなかった。」

今では珍しくなくなっているが、当時、ドジな作者が作品に頻繁に登場したりふざけたような話の設定は北杜夫の独壇場だったと思う。とにかく、この作品をきっかけに私は北杜夫の世界にはまり、彼の作品を読みあさるようになった。偶然にも雑誌の懸賞で北杜夫の直筆サイン入り『どくとるマンボウ青春期』が当たり、大学に行こうと思ったのもその本との出会いからである。読書嫌いな高校生がいつのまにか普通に本を読む生徒になっていた。

知識欲は旺盛だけど、学校の授業と特に宿題が大嫌いな私のような高校生にとって、船乗りクプクプの冒険は非常に心地のよいお話だった。

「何かを覚えていても、頭のいい証拠じゃない。その知識から自分でくふうして、応用ができる人が頭がいいのだ。バカの一つ覚えていうじゃないか。たとえ百でも千でも、覚えていてもそれだけじゃやっぱりバカなのだ。」

大学とは何か、大学の授業はどうあった方がいいのかについて考えることの多い現在の私にとっても、久々に読んだこの本はいくつかのヒントを与えてくれた。

そして、目指すべき社会像をこの童話は35年前にすでに描いているような気がする。

「私たちは高い文化をもっている人種じゃ。深海の底のことも原子力のことも研究している。わたしたちの技術をもつてすれば、ここに大都会をつくり、電気をおこし、文化的な生活を送るのはやさしいことだ。けれどもわたしたちはそれをしない。文化というものは便利ではあるが、あまりに勝手にすすみすぎると、人間はつい目標を見失ってしまうものだ。何のために生きるのか、幸福とはどういうことか、とかいうことをついに忘れてしまうものだ。だからわたしたちは研究だけはするけれど、やはりハダカで腰ミノをつけて暮らしている。太陽をあび、風にふかれ、大地をかけまわる。そしてわたしたちはそれで満足しているのじゃ。」

芳賀啓寿・佐藤史子 編著

『らくらく行政書士 講義そのまんま』

(週刊住宅新聞社 2005年発行)

法経学部法経学科3年次 伊 佐 英 一

あなたには、今夢がありますか？将来どのような仕事についているのか、考えた事がありますか？私は、そういう事を真剣に考える機会がまったくありませんでした。図書館に行って、たまたま資格試験対策の棚を見ていた事がきっかけで、私の将来やりたい仕事の夢が見つかりました。

行政書士は、「憲法」、「民法」、「行政法」、「行政書士法」、「商法」、「その他の法令」など広範囲を扱う町の法律家とされています。私の推薦する「らくらく行政書士講義そのまんま」という本は、初めて行政書士を目指す人に対しても、重要な言葉を黒太文字で表すなどの工夫をして分かりやすく説明されているので、理解しやすい本です。行政書士に関する本がたくさん出版されていると思いますが、分かりやすくまとめられているのもあれば、説明の言葉が難しく理解するのが困難な本もあると思います。また、易しく書かれていると言っても、内容が難しいと感じる人もいるかもしれません。しかし、この本は、とても分かりやすくまとめられているので、本当にお薦めの本ですし、納得できると思います。私は、行政書士の勉強をする前は、法律という言葉を目にしただけで、難しいとか理屈っぽすぎるとか、マイナスなイメージとして、とらえていました。そう考えている人も多いと思います。しかし、イメージが先行してしまい自分で勉強しないから難しいと思うのでしょう。自分で楽しみながら、焦らずに、興味のあるものから（例えば、新聞を読む人なら、新聞から法律を学ぶなど）入り込んでいくと、

理解しやすくなると思います。私もこの本と出会って、自分で興味を持ちながら勉強してきたから、法律というイメージが私自身は変わりました。自分で勉強するという事は、本当に意味がある事だと思います。この本は、とても分かりやすいので、一度読んでみてはどうですか。もしかすると、これがきっかけで法律のイメージをプラスに変えていけるかもしれません。法律の勉強には六法全書が必要じゃないかと思う人もいます。六法を持ち歩いて勉強するのが大変だと思うかもしれません。確かに六法は大切ですし必要です。嬉しいことに、この本は条文も引用されており、また星の数で難易度も表してくれているのでお薦めです。この本は、かなり内容を絞り込んで解説していますので、準備時間があまり多くない方にも学習をお薦めできる本です。資格を取る事ができれば、新しい道が開けるかもしれません。

夢がある事は、本当に良いことです。しかし、夢を持つだけで成功できるのでしょうか？私はそうではないと思います。この夢を行動に移すか、移さないかで、とても大きく変わってくるのではないのでしょうか。夢はただ持つだけでは何なりません。将来の自分の事を考えて、自ら行動して叶うものだと思います。私は、この本から勉強だけではなく、他の何かも教わった気がします。今は資格取得のための勉強で「大変」ですが、これは自分が「大きく変わっている」証拠なのです。一人でも多くの方にこの本を読んでいただき、法律について多くの知識を身につけてほしいと思います。

小室直樹 著

『痛快！憲法学』

(集英社インターナショナル 2001年)

人文学部国際コミュニケーション学科3年次 兼 城 賢 雄

巷に溢れる憲法本には辟易してしまう。憲法談義もまた然り。時代錯誤の憲法だと罵られたり、平和憲法だと奉られたりと、憲法 (Constitution) が本質的に語られる事は少ない。

一方の主張は統治者と同調している。では利するのは誰か。憲法とは、国民が統治権力に向けた命令に他ならない。これまで憲法精神を蹂躪してきた連中と、この期に及んで結託するとは。

もう片方といえば。憲法原理を捉えぬ様は教条的でさえある。不磨大典だと神棚に祀り、条文を引いてはお題目の唱和。これ日本国憲法の主旨に反する。

博学者・小室直樹氏の視点。それはあくまで学問的観点からの憲法論である。昨今の改憲派・護憲派が決定的に見落としている点、それはこの「学問的」に憲法を分析するという精緻さである。故に、小室氏が一貫して語る「日本国憲法は死んでいる」という死亡宣告を聞き捨てるわけにはいかない。

小室氏の著書には特徴がある。それは、読み進めていくにつれ、タイトルと関係の無いような話題にまで話が及んでしまうことである。(『日本人のためのイスラム原論』での天台宗「天台本覚論」の驚くべき仏教戒律撤廃、『中国共産党帝国の崩壊』でのナチス台頭の理由、レーガノミクスの功罪等々) だが、それが読み手の誤解であると気付くのにそう時間はかからない。全ては連関して説明されているのだ。

本書でも、冒頭はワイマール憲法、アメリカ合衆国憲法の説明から入る。19世紀半ばにアメリカ・カリフォルニアで起こったゴールド・ラッシュに話が及び、そしてこの時代のアメリカ

には民主主義も法もなかった、と結ぶ。120年前、「アメリカ憲法は死んでいた」のだと。

碩学はさらに政治学・歴史学・宗教学・経済学の観点から憲法の成り立ちを解き明かしてゆく。教える側にとってはそんなことは常識の範囲なのだろう。だが、学生にしてみるとこういった学問の枠にとらわれない説明は斬新である。目からウロコが落ちる思いがするのだ。学生だけでなく、教員諸兄にもぜひ参考にさせていただきたいものである。

天衣無縫のレクチャーは、ヒトラー、「天皇教」、官僚支配にまで及ぶ。その頃には、あまたの憲法論議なぞどこ吹く風で、病すでに膏肓に入った日本の姿をまざまざと知らしめてくれるだろう。

小室氏の主張はどこかワクチンに似ている。一読すれば胡散臭く毒がありげだ。だが、他の書物に手を伸ばしたとき、思考に自然と抗体が出来ていることに幾度も驚かされる。

近い将来、各政党がそれぞれの憲法観を打ち出し、主権者たる国民に問う日も遠くはないだろう。さて、あなたは自信を持って審判を下せるだろうか。国民主権の醍醐味を、体感することが出来るのだろうか。

本書「痛快！憲法学」は入門書として、または復習本としても十分に価値をもつ本であることは間違いない。小室ワクチンの絶妙な効果、ぜひとも堪能していただきたいものである。これ、接種中毒者からの誘惑。

姉妹篇の「日本国憲法の問題点」(集英社インターナショナル)もおススメ。

村松 秀 著

『生殖に何が起きているか』

(日本放送出版協会 1994年)

人文学部福祉文化学科4年次 赤 嶺 一 子

33年前、私は最初の子を身ごもった。現在のような超音波診断技術等が普及する前で、生まれるまでは「五体満足であるように」と願うだけであった。食事に気を遣い、妊婦だけに言い伝えられたタブーも破らないようにしていた。今から思うとその頃は、DDTやPCBなどの合成化合物が平然と使われていた時代である。しかし、当時の私にはそれが環境ホルモンと呼ばれるものであるとは知る由もなかった。

自然界の生殖が攪乱される事態が起こり、世の中が騒ぎ始めた頃、私の子どもたちは、少年期を過ぎ青年期に入っていた。既に農薬漬け野菜、化合添加物、合成化合物などによってつくられた生活用品が、私たちの生活の場を埋め尽くしていた。

“既に時遅し”と言え、私の「無知」が子どもたちを“環境ホルモン漬け”にさせていたのではないかと一抹の不安に襲われる。

『沈黙の春』から『奪われし未来』まで、約30年という時間を要して、世界中が環境ホルモンに注目し始めた。日本でも1998年6月、環境ホルモンに関する「日本内分泌攪乱化学物質学会」が設立された。

本書は、時を前後するように、1997年から98年にかけて、NHKスペシャルで放映された『環境ホルモン汚染～人間の生殖に何が起きているか』『生殖異常～しのびよる環境ホルモン汚染』を中心にした取材の内容をまとめたものである。

この番組から「環境ホルモン」という言葉が生まれたのであるが、人間に迫り来る環境ホルモン汚染と、今後考えられる対応策について、取材経過をプレイバックしながら、全人類・全

生態系にとってあまりにも重い十字架である環境ホルモン汚染の問題を論じている。そしてまた、海外と日本との間でのこの問題に対する取り組みの違いをも如実に物語っている。

「疑わしきは規制する」という欧米の発想と、「分からないものは、分かるまで規制しない。疑わしきは罰せず」という日本の発想、曖昧さを美德とする日本の社会が、環境ホルモン汚染に対する取り組みを遅らせている。そういう社会体制のために、水俣病を皮切りに、カネミ油症、薬害エイズ、最近のアスベスト汚染等、人命と直接関わるような対策が、常に後手後手にまわっている。

この著書は「なぜ、日本では対策や取り組みが遅れるのか」について、次のように分析している。

*「全てをうやむやにする社会、何事も隠す社会、穏便に済ます事ばかりで根本的な解消を図らない社会、目立つことを良しとしない社会、打てば響かない社会。これは日本的な土壌に根ざした社会構造である」と言い放ち、浄化作用を打ち消し、ますます社会をよどませていると述べている。

知っていることが、最大の防御である。国は何もしてくれない。“待つのではなく、自ら求める”、そうしなければ自分自身のことも、愛する人のことも、護ることはできない。私はこの著書を読んで改めてそう思った。日本の社会が変わるためにも、私たち自身の力で変えていくためにも、若い学生の皆さんに是非読んで欲しい一冊である。

本学における電子ジャーナル導入事情

法経学部助教授 藤澤 宜 広

2005年4月より、本学図書館では経済・経営系外国雑誌約3,700誌について電子ジャーナルでの利用が開始された。電子ジャーナルとは、オンライン及び電子媒体によって配布される雑誌（ジャーナル）をいう。ここでは、本学図書館における本格的な電子ジャーナルの導入に携わった者の1人として、その経緯および現状を報告することにより、今後の大学図書館運営について考える材料を提供したい。

2004年4月時点において、本学図書館における経済・経営系学術外国雑誌の購読雑誌数は35誌のみであった。一方で、シリアルズ・クライシスと呼ばれる雑誌価格の高騰が世界規模で続いており、これに対応する形での電子ジャーナルの普及は世界的な趨勢となっていた。そこで、図書館運営委員として、また電子ジャーナルの利用者として、導入の検討を始めた。

この取り組みは、当初から難航が予想され、実際その通りであった。予算の確保、学内理解の促進、購読電子ジャーナルの選定など、本来、複数のステージに分かれている作業を同時に進行させなければならなかった。第1に、予算については、新たな獲得が非常に困難であったことから、既存の購読雑誌をキャンセルすることで捻出することとなった。これは、蔵書を一義的な目的とする大学図書館において、大きな意思決定であると言わざるを得ない。多くの大学図書館が直面している問題ではあるが、限られた資源をどのように配分するかに関しては常にトレード・オフが存在している。

第2に、学内理解を得るために、図書館運営委員会の場での説明に限らず、トライアル、利用説明会を開催するなど、折に触れて広く呼びかけを行った。幸い、一定程度の学内理解を得ることができた。とりわけ図書館職員の中から賛成意見が出てきたことは心強かった。また、私立大学図書館コンソーシアム（PULC）への参加も実現した。

第3に、電子ジャーナルの選定においても、作業は困難を極めた。業界や他大学の動向を知るために相当の時間を費やした。また、何千ものジャーナルの1つ1つについて複数の資料を比較・検討するという地味な作業もあった。最終的には、アグリゲーター系データベース（EBSCOhost Business Source Premier）を基盤とし、そこにいくつかの出版社系データベース（Elsevier ScienceDirect Economics Econometrics and Finance, Blackwell Publishing Synergy）、非営利団体系データベース（JSTOR Business Collection, NBER Working Papers Online, EconLit）を組み合わせる方法が採用されるに至った。なお、ScienceDirectについて創刊号から最新号までカバーされていることは言及に値する。

最後に、今後の課題について挙げる。まず、今後も利用説明会やアンケートの実施を繰り返すことで、利用促進や利用者の需要の把握を行う必要がある。また、電子ジャーナルの特性として販売業者との交渉の余地が大きいことなどから、購入者側が情報リテラシーや業界の動向に詳しくならなければならない。実際、情報収集の過程において、本学で導入しているデータベースをかなりの割高な料金で契約している大学をいくつか耳にしている。本学においても、次年度契約に向けて厳しい交渉が予想される。データベースの再検討も必要となるかもしれない。そのためにも、他大学との連携が不可欠であると思われる。PULCへの参加はそのきっかけとして期待される。

導入に際して、多くの学内・学外関係者の方々にご協力を頂いた。個別に氏名を挙げることは差し控えさせて頂くが、この場を借りてお礼申し上げたい。

電子情報サービス(データベース/電子ジャーナル)のご紹介

図書館主査 金城直樹

「情報化社会」といわれる時代になって久しいが、膨大な情報資源の中から必要な情報を効率よく的確に検索し、収集・活用することは、現代においてますます重要になってきています。

このような時代に対応すべく、本学図書館ではインターネットを利用したオンラインサービスをメインに、各種データベース、電子ジャーナルを導入しています。

学内はもちろん、自宅などの学外からでも利用可能なサービスを提供していますので、講義の課題に関する調査や自主学習、卒論執筆、研究など、さまざまなシーンでこれらサービスを活用していただけると幸いです。

なお、本年度中に、主要サービスの利用説明会の開催を計画していますので、多くの教員・学生の皆さんにご参加いただき、これら「便利なツール」を大いに利用して欲しいと考えています。

「データベース? 電子ジャーナル? なんか難しそう」なんて思っているあなた、ぜひ一度使ってみてください。案外簡単に便利なのがわかるはずですよ。

<用語解説>

・**データベースサービス**：新聞記事、図書・雑誌目録や所蔵情報、法令・判例データなど、蓄積されたさまざまな情報（データベース）に対し、キーワード（検索語）を指定して該当するデータを簡単に探し出すことができる。

・**電子ジャーナル**：パソコン上で雑誌（冊子体）と同等な情報を見ることができる。ほとんどのサービスにおいて、ジャーナルの内容（タイトルや著者名等）に対し、データベースサービスのような検索機能を備えている。

<主要サービス>

データベース		電子ジャーナル	
Scopus	各種分野を網羅する抄録・索引データベース。14,000誌以上	EBSCOhost Business Source Premier	経済・経営分野の外国雑誌。 全文：約3600誌
EconLit	経済学の基本的な抄録データベース。約1,000誌	Elsevier ScienceDirect	経済学・計量経済学・財政(86誌)、社会科学(5誌)の外国雑誌
・Westlaw ・LEX/DB	アメリカ/日本の法律情報データベース	JSTOR Business Collection	ビジネス分野の主要外国雑誌：46誌
GeNii	国内の論文情報・図書情報・学術研究情報等のデータベース	NBER Working Papers	米国経済研究機関(NBER)が発行する研究報告書の全文
・日経テレコン ・G-Search	全国紙や琉球新報の新聞記事検索（利用条件あり）	CiNii	国内学協会の学術雑誌、大学紀要の全文や、雑誌記事索引。

※上記以外の情報サービスも提供しています。詳しくは図書館ホームページ (<http://www.okinawa-u.ac.jp/lib/>) をご覧ください。

新着図書案内(抄)

請求記号	書名	著者名	発行所
007.35 N58 017.7 Ka96 069 O27 158 Ka93 195.1 Kin	起業人：成功するには理由がある! 変わりゆく大学図書館 エコミュージアムへの旅 大人の友情 God and Caesar in China : policy implications of church-state tensions	夏目房之介著 逸村裕, 竹内比呂也編 大原一興著 河合隼雄著 Jason Kindopp, Carol Lee Hamrin, editors	メディアセレクト 勁草書房 鹿島出版会 朝日新聞社 Brookings Institution Press
210.3 R32 222.406 N77 289.3 D93 307 N99 312.21 Kih 318.7 G34 326.26 Ka25 329.94 Ku79 332.2 Pem 335.15 R63 338.7 G81 367.21 J99 369.26 U45 372.107 Ta12 469.2 Ka21 491.371 N95 518.8 H44 519.13 Ka56 675 Sa66 778.221 Ki41 801 C53	東アジアの王権と交易：正倉院の宝物が来たもうひとつの道 日本統治下台湾の支配と展開 W・E・B・デュボイス：人種平等獲得のための闘い 入門社会のしくみ：複雑な世の中を理解するための道具箱 Transforming Korean politics : democracy, reform, and culture 「元気なまちづくり」のすすめ：成功のための3つの原則と9つのポイント 消費者保護と刑法：悪徳商法をめぐる犯罪 難民を追いつめる国：クルド難民座り込みが訴えたもの Remapping East Asia : the construction of a region 内部告発の研究：あなたの知らない告発者と企業のその後 21世紀の消費者信用市場：公正・透明かつ競争的な市場を求めて 女性の自立とエンパワーメント：学際的研究をふまえて 老いる準備：介護することされること 多文化共生のまちづくり：青春学校10年の実践から 人類がたどってきた道：“文化の多様化”の起源を探る 脳の中身が見えてきた 人間都市クリチバ：環境・交通・福祉・土地利用を統合したまちづくり 環境ISO有効利用のエッセンス 心が消費を変える：消費者心理の変化と消費増減の関係を探る 韓国映画躍進の秘策：韓日文化交流の新時代 生成文法の企て	李成市著 台湾史研究部会編 千葉則夫著 杏林大学総合政策学部編 Young Whan Kihl 元気なまちづくり研究会編集 垣口克彦著 クルド人難民二家族を支援する会編著 T.J. Pempel 六角弘著 英国貿易産業省著 神谷治美 [ほか] 共著 上野千鶴子著 青春学校事務局編 海部陽介著 甘利俊一, 伊藤正男, 利根川進著 服部圭郎著 黒澤正一編著 佐野美智子著 金鍾文著；村山匡一郎編 ノーム・チョムスキー [著] ; 福井直樹, 辻子美保子訳 上村和美, 内田充美著 王志英著 池澤夏樹著 高木智彦著 David Der-wei Wang	青木書店 中京大学社会科学研究所 近代文芸社 丸善 M.E. Sharpe ぎょうせい 成文堂 緑風出版 Cornell University Press 日本実業出版社 東洋経済新報社 ミネルヴァ書房 学陽書房 明石書店 日本放送出版協会 岩波書店 学芸出版社 晃洋書房 多賀出版 パンドラ 岩波書店
〈琉球弧関係〉			
R201.7 Ta82 R289 25 R302.2 O77 R361.45 O52 R510.92 O52 R753.8 Ko11 R800 Ts39	特攻に殉ず：地方気象台の沖縄戦 国家を超えた思想伊波普猷 次代の選択：沖縄発!東アジア共同体 アジア太平洋情報フォーラム研究班シンポジウム「少数者からの情報発信」 沖縄の開発を考える：歴代沖縄総合事務局次長に聞く 沖縄島々の藍と染色 危機に瀕した沖縄諸島方言の緊急調査研究	田村洋三著 西銘圭蔵著 大城浩詩[著] 小橋川順市[著] 津波古敏子, 上村幸雄編	中央公論新社 ウインかもがわ 閣文社 沖縄大学地域研究所 沖縄建設新聞 染色と生活社 大阪学院大学情報学部

(2005年4月～2005年9月)

2005年度 図書館運営委員

所属	氏名
図書館長	田里 修(図書館運営委員長)
法経学部	藤澤 宜広(図書館報編集委員長) 朝賀 広伸
人文学部	陳 晋 松本 晶子
図書館	嘉数 和子 金城 香代子